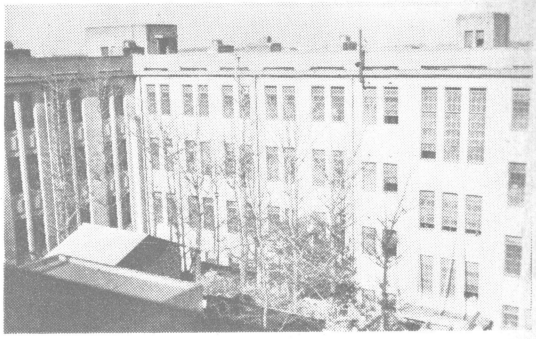
地方だより

東京教育大学理学部地理学教室

編集部から〝地方だよりを書け〟という話があったので，一つ変ったところ，東京都大塚村の地方だよりを送りたい．

この地理学教室には，自然地理学２講座，人文地理学２講座あって，現在わが国最大の地理学教室である．職員13名，内外の講師数名，学部の学生１学年約25名で総数約100名，それに修士・博士科程の学生十数名をかかえる大世帯である．しかるに，研究室・教室は少く，かつせまい．実験室は２～３名で満員となり，模型や機械は部屋部屋のあちこちに放置され，図書や資料・地図類の整理もむずかしい．スペースが少ないのは日本の縮図である．まことにゴミゴミしていて，年何度かの大ソージのときには，チリの山がきずかれる．チリの総本山の名に恥じない．

研究も，職員の数が多いから地理学のうちの自然科学的，社会科学的各分野にわたっている．地形学・河川学・陸水学・土壌学・気象学・気候学などを始めとし，経済地理・農業地理・工業地理・都市地理・交通地理その他に至るまで，幅が広く，同じ教室にいても，他人の研究が自分のと少しかけ離れ過ぎて，よく理解できないことさえある．



気象学のごやっかいになっているのは，このうち，自然地理学第２講座に属している人間が主である．教授福井英一郎，助教授関口武の両博士のもと，教室に数名，卒業生数名がいる．学部と大学院にそれぞれ３～４日の野外実習が年１度あり，地方において野外調査や観測を行う．学生にとって楽しい思い出を残す旅行ともなる．この実習で，器械をこわしたり，眠い目をはらしたりして，やっと，観測法の奥伝をさずかる．野外用の自記温度計やポータブルの風向風速計，その他，野外観測器械の数が割合そろっているのはこのためである．かって，メーカーの一店員がきて，「うちの器械がこんなに並んでいるのをみたのは初めてだ」といったほどである．

最近，実験室や測器を充実するよう努力している．その一つ二つを紹介すると，「携帯用サーミスター温度計兼風速計」「サーミスターを利用したサーモレギュレーター付きの80リットル恒温槽」「50㎝風洞」などがある．野外で観測していると，案外に〝検定証以上の器差？〟が大きいことに気づく．何んとかならんものかという声がこの数年間積って，ベニヤを１枚，ガラス板を１枚と買い集めては手仕事でエッチラオッチラ作りあげ，やっと上の３つとも外形だけは整ってきた．携帯用サーミスター温度計兼風速計は，完成すれば，ポケットに入るくらいの大きさで乾温計と風速計の役をやってくれるはずである．しかも，寒い冬の日など，この写真のようにコゴエながらでなく，ずっと離れた暖い部屋の中で，コタツにでもあたりながら観測ができる．そして「実験室内における器差」は，はっきり確めておけるから，野外における観測誤差の大きさも見積ることができよう．風洞はまだ殻だけで中がない．夏ごろまでには完成させ，フルに廻して部屋中のゴミ（チリではない）を吹き飛ばすのだと，楽しみにしている人もある．　（吉野正敏）

写真説明
1955年１月３日午前８時．蔵王の地蔵岳と三宝荒神岳の鞍部にて．アスマン乾湿計，中浅式風向風速計，野外用自記温度計がみえる．
（五百沢智也撮影）